# ネットワークボード

2016 年 7 月 26 日未明。神奈川県立の福祉施設「津久井やまゆり園」で起きた痛ましい事件は、障がいのある人たち本人と、その周辺の人たちを始め、多くの方々に大きな衝撃を与えました。亡くなられた方 19 名、重軽傷者 26 名。改めて亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、その後論争となった優性思想については、決してあってはならないと感じているところです。やまゆり園はその後解体・再建され、2021 年に入所が再開されましたが、実は元入所者で地域でのひとり暮らしに移行された方もいます。当時の葛藤や現在の暮らしの様子などを伺える興味深いシンポジウムです。　（編集部）

**津久井やまゆり園を出た人たちのその後**

～地域生活は実現できたのか？～

**7** 月 **27** 日（土）13：30～16：30

ユニコムプラザさがみはら　セミナールーム１　(相模大野)

申し込み：sugi808@infoseek.jp　☎080-5494-3439

資料代：500 円

主催：津久井やまゆり園事件を考え続ける会

登壇：田中恵美子氏（東京家政大学教授）

尾野剛志氏（元やまゆり園入居者家族）

平野泰史氏（元やまゆり園入居者家族）

## 編集後記

我が家の障がいのある次女が今年成人式を迎えました。就労継続支援Ｂ型事業所で、嫌な（苦手な？）仕事もあるようですが、多くの仲間たちとがんばっているようです。これは障がいのある次女に対してだけではなく、我が家３人の娘たちすべてに同じ考えなのですが、私は社会に出て働きだした娘たちにそれまでのような「子ども」という感覚ではなく、「同じ社会人」として「同じ大人」として接するように努めています。それを察してなのかはわかりませんが、特別支援学校に通っている頃には私の帰宅時「お帰りなさい」だけだったのが、社会人になってからは「お疲れ様」というひとことが加わるようになりました。働く大変さを実感するようになったのか・・。

ぱれっとの事務局長であり、障がいのある娘の父でもある私には、支援者としての視点と家族としての視点の両方が必要といつも思っています。良く、「親離れ」「子離れ」という言葉を聞きますが、私が思うに、子どもの親離れ（反抗期とも言う）が先、そしてそれを見て親が、もう子離れをしなくてはと気づくのが自然な流れだと思います。しかし、もちろん全てではありませんが、障がいがあるというだけでなかなか本人の親離れの気持ちが育たずに（あるいは周囲が気づかずに）結果、子離れもままならない親子関係を多く見かけます。物理的に離れるという意味ではなく、まずは彼らをひとりの大人として見てみることが大事なのではと思います。　（みなみやま）